

児童生徒支援のための『ワンポイント・アドバイス』

～気になる児童生徒との関わり～



学級づくり 12 箇月

平成 26 年 1 月号

京都府丹後教育局

Tel : 0772-22-2175 Fax : 0772-22-0479

HP : <http://www.kyoto-be.ne.jp/tango-k/>

この便りは、平成 24 年度丹後特別支援教育研究会研究グループⅡの協力を得て作成しております。

気になる児童生徒への支援

発達障害等の有無にかかわらず、行動面で何度も失敗してしまうなど、困っている児童生徒は少なくありません。そういった児童生徒の行動パターンを特別支援教育の視点から見てみると、支援の方法が見えてきます。

忘れ物が多い、提出物の期限が守れない！



大事なことが覚えられない。

話を聞いたときは覚えていても、翌日には忘れて、忘れ物が多くなってしまふことがあります。

忘れ物を少なくするために、保護者と連携することが大切です。大事なことを毎日もれなく書かせる、準備をした物には二重線を引かせるなど視覚的に確認できる手立てを行います。自分自身でメモをとることにより、将来、自分が困らないよう自分で対処する力を身に付ける支援を行います。

計画的に課題に取り組めない。

長期休業期間中の課題など、提出物の期限が守れず、出せないままになってしまうことがあります。

何を何分やればできるか、見通しをもたせるよう、カレンダー等を用いて、計画を明確にします。短期のスパンで確認し、できていたらほめる声かけをします。また、計画途中でチェックをし、できていない場合は、計画の見直しをするなどの工夫も有効になります。期限を過ぎて待ち、努力を認めることが大切です。

落ち着きがない！



見通しがもてない。

苦手な課題や興味もてない内容に向き合えず、その取組時間がどのくらい続くのかわからず、いらいらしたり落ち着かなくなることがあります。

見通しが持てるように、終わりの時間を明確にして黒板に表示したり、1時間の授業の流れを黒板に示し、これからの授業の展開を事前に知らせておくことが有効です。

他に気になることがある。

窓の外の音が気になったり、学級内の私語が気になったりして、必要な音を上手に拾えないことがあります。

窓から遠い座席配置にしたり、説明を聞き逃しても黒板を見て自ら気付くような視覚的な支援をすることが大切な配慮です。

座っていることが苦手である。

じっと座っていることが苦痛で、立ち上がってしまうことがあります。



弾力のあるもの、チクチクするものなどを触らせると落ち着く場合があります。また、身体にイスや机の高さが合っていないことが原因となっている場合もあり、イスや机の高さを調整することも有効です。配布物を配る役割を与えるなど、合理的に立つことを認めることも配慮の一つです。

友だちとのトラブルがよく起こる

すぐに行動に移してしまう。

相手がどう感じているのかを理解することが難しいことがあります。そのときの自分の気持ちがすぐに行動につながってしまうことがあります。

そのときの状況を絵や図に表して、誰がどのような行動をしたのか、振り返る時間をつくります。自分の行動や相手の行動を振り返ることで、相手の気持ちに気が付くことができます。

ルールが難しすぎる。

ルールがなかなか理解できないことがあります。特に暗黙のルールや明確になっていないルールは分かりづらいことがあります。

学級の決まりや体育におけるゲームのルールにおいても、視覚化して常に掲示したり、その都度、黒板に貼る支援をすることで、誰にでもわかりやすくなります。

こだわりが強い。

学校生活の中でのルールや決められたことに、とても厳しく、友だちに対して、言葉を選ばず指摘して、学級から孤立してしまうことがあります。

友達との会話の仕方や接し方を学ぶには、その一つの方法としてソーシャルスキルトレーニング（SST）があります。また、不適切な関わりが見られたときには、本人が理解しやすい方法で適切な関わり方を具体的に指導していく必要があります。

自己肯定感を高める



普段の行動が、周りからマイナスに評価されやすい児童生徒は、**怠けていると誤解**され、厳しく叱られることにより、**自己肯定感を下げ**てしまいがちです。また、苦手なことを克服するためにと、本人にとって無理な課題にも取り組むことになり、一層、**苦手意識が強くなる**こともあります。そのような経験を積み上げていくと、自分への**自信を失**ったり、大人や社会への**不信感を募**らせたりして、さまざまな**身体症状**があらわれる場合があります。また、**不登校**に陥ったり、**反社会的行動**に結びついたりすることもあります。

子どもの自己肯定感を高めるためには、一番近い大人が本人の思いをしっかり受け止めることが何より大事になります。受け止めるということは、その子をしっかりとすることでもあります。他との比較で子どもを見るのではなく、その子自身の成長を見つめ、**少しの成長・伸びに気付いていく**ことです。子どもは、一人一人さまざまな感じ方や学び方をします。そういった違いを受け止め、認め合える環境づくりが必要です。**個々の感じ方・学び方を認め、指導する側がその方法を工夫**することで、子どもたちの学びが一層深まり、自己肯定感を高めることにつながります。

